

長尾さんと廣井先生を偲ぶ

十川嘉太郎

廣井勇博士逝いて早くも九年になる。博士の徳を慕ふ人々により、今年も十月一日を期して、博士が永遠に眠る多摩墓地に記念の會が催されるであらう。博士はさき頃物故された長尾半平氏と共にわが土木界に於ける二大人格者として永遠に其名を記念されるべき人である。長尾氏は後年二十有餘の會社や公共團體に關与され、土木家としてより寧ろ實業家、實業家としてより寧ろ宗教家いや教育家として有名な人であつた。本年六月氏が朝鮮總督府に於て倒れられ間もなく逝去されたとの報に接した時は異常の悲しみを覚え、機會を得て氏の業蹟の一端を記して追悼の意を表するつもりであつたが、茲に十川嘉太郎氏の寄稿を得たので、廣井博士の記念日にも相當する十月號の誌上を飾ることにした。カツトは十川氏の筆蹟である。(編者記)

昭和十一年の六月二十日に長尾半平氏が逝かれた。

願ふに、私の過去生活の大部分は土木であつた。此の事業中にて高誼を蒙り、尊敬して措かなかつた方は長尾さんと、今一人九年前に亡くなられた廣井勇先生であつた。而して其親みを受けし年数は共に三十八年の長きに亘つて居るので、其印象は今尙瞭々たりであります。兩氏の事蹟は既に幾多知名の士によりて紹介されてあるが、今自分の斷片的の記憶も亦捨つるに忍びず兎も角も綴ることとした。

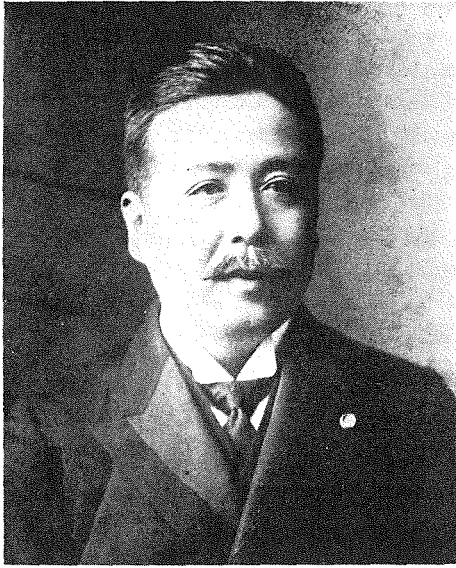
長尾さんは北國の村上藩で儒者の血統の家に生れられた。氏は中學卒業後志を立て上京せられたが、固より獨立獨行の考であつたので、先づ働かねばならぬ。そこで知人の傳を求めて晝間は築地郵便局の窓口で働かれ、夜は學校に通ふて勉強せられ、以て官費の工部大學校に入學になつたと聞いて居ります而して氏の生家が儒教主義であることから、外來渡傳のキリスト教が意に滿たず、國家の爲め徹底的に撲滅せんと考へ、研究を始められましたが、終いに其反對に熱心なる基督教信者となられました。而して經世的卓見を以て禁酒報國に一生涯を賭し、其運動に始終せられ、又基督教教會員としては、力弱くては救世が出来ないから互に其長所を眺め合つて、合同する事が必要であるといふ理由から、各派合同運動に盡力されましたが、まだ纏りませんでした。そんな事から各派は氏を基督教徒の長老者として尊敬し、長尾家葬儀の際にはいつも各派の牧師が多數出席しました。

其の性行は極めて嚴格な妥協の少ない人で、始めて洋行さるゝ送別會の席上、時の財務局長祝氏が『長尾さんといふ人は長い棒を持つて森の中を旅して居る様な人である』云々と挨拶された事を覺へて居ますが、實に同感でありました。

斯様な一面の持主でありながら、他の一面には常に人の善き方のみを見て人に接近せられましたから、其の交際も廣く又多方面でした。

『人を人格的に見る人は自分も亦人から人格的に見られる』とは誠に氏の如き人をいふのかと思はれました。

氏は初めての人にも必ず柔かい温かい感情を以て接せられました。それで來訪者も多く役所にもつねに三四人の客は絶へなかつた。而して一度氏の警咳に接した人は皆其の人格に敬服したのであるから葬儀の當日の弔客二



廣井 勇 博 士

千人は怪むに足りません。

又長尾さんは部下を紳士として取扱ひ、其私行については何等干渉せられませんでした。而して飽くまでも人の長所を助長する事を樂んで、蔭になり日向になりして弱きを扶けるといふ風でありました。臺灣にて私の關係した工事で切取水路の一部に山崩れがあり其爲め隧道に變更せねばならぬ事が起り、豫算の増額が必要になりました。其事を當時局長であつた長尾氏が後藤長官に話されました。所長官は設計者なる私の粗漏を責められました。すると長尾さんは『これは不可抗力です』と先づ辨護して、徐に『ある他の工事が豫算が非常に餘つて居りますのに、其の方は何とも申されず、不足の方丈をお責めになるなら今後工事者に絶対安全に設計せよと申しつきます』と申されましたので後藤長官は『君はい、言葉を知つて居るね、智者には叶はない、一本參つたよ』と破顔一笑、それで萬事解決した事がありました。部下に對する寛容は常に此くの如くであつた。

又部下を免職さすと云ふ様な場合でも、十

分に其人の將來を考慮して善處されました。有名なる英國の女皇ヅキトリア陛下が、臣民の死刑宣告の決定には三日も四日も神に祈つて後、始めて花押されたといふことを記憶されて居り、自分も人を免職さす場合には必ず祈を捧げて之を執行すると話されたことがありました。それも自分一個の感情や都合で齧首するといふ様な事はたゞの一度もなかつた事は慥であつた。いつも役所の都合上已むなく行なはれた淘汰であつたから、免職された者も熟思の後は誰一人人を怨む者とはありませんでした。

氏はかゝる性格の人であつたから純粹の工學者技術者と云ふよりも寧ろ政治家といつた方が適當でした。

人は謂ふ『法科でも卒て居られたらより以上早く出世せられたらうに』と申しますと氏は『何も方向(法工)を間違へた譯ではない、工科出身にも此位のものがあつた方がよいではないか』と返答されました。法學でなかつた許りに民政長官も逸し禁酒家であつた許りに議員が逃げ、餘り融通をしないといふ事で滿鐵の高位も話のみに終つたといふ事が、人の話題に上つたことも聞きました。

氏が門司鐵道局に赴任になつた時に、ある技師が『×××の公式を御存じですか』と尋ねたところ、氏は『いや知らぬ』と涼しい顔をして居られました。そうすると技師が『工學士が×××の公式も知らんでは』と蔭口を叩きましたのを聞かれて『その公式を知らんでも局長は務まるよ』と平然として居られました。まことに太ッ腹の人であつた。

それも其の管です。頭腦明哲な長尾さんの工學は多分教室丈の勉強であつたのでせう而して曰く『俺は人間學の研究に没頭して居る、凡てのものは人間から出るものだ、何程技術が出来ても人間の根本義が出来ていなければ役に立たん』と言つて基督信者になられた土木の根本的な經世的な指導者となられたのであります。而して幾つかの高位置が逸せら



長尾半平氏

れても別に氏の光輝は傷つけられる事はありませんでした。

そして人間が出来たといふ証明を先づ山形縣で表はされた。それは長尾さんが山形縣の土木課長として赴任された時、縣會議員等は得意の法律論を以て若い土木課長をへこましたので、長尾さんは兼ねて通讀して置いた法學通論の知識にて凡てを論破しましたので、議員は勿論木ノ下知事も驚いたのである。而して之れが原因になつて後藤長官に見出されたとは氏の述懐でありました。

長尾さんの工學とニトベ先生の農學は似たものである。臺灣で佐久間總督がニトベ先生を呼び、後庭の西瓜の作り方を聞いて失望されたといふ話を聞いてゐるが、ニトベ先生は西瓜の作法を知らずとも立派な農學博士である。後年兩氏が工學でも農學でもない國士本位ですの大平洋會議に於て共に重要な部分を働かれましたのは奇縁であつた。

ニトベ先生が『自分は大平洋會議では御客様で長尾が萬事幹旋して呉れるのだよ』と言はれて居りましたが、今は兩氏とも亡くなら

れ、大平洋會議の名も何やら私には淋しく響く様な氣がいたします。

長尾さんは第一者主義であつた。よく青年が『今後何科をやつたら一番ようございますか』と何ひを立てると、何でもよい一番におなりなさいと教へられました。

長尾さんは帽子でも靴でも一番高價なものを取られ、洋服も最上仕立で、長尾さんの催さるゝ宴會はいつでも無酒の最善美のものであつた。而して常に言はれた『僕にはスリフト(thrift)といふ事が一番六づか數い』と、これは第一者主義の崇りであつた。

人間の採用も矢張り第一者主義であつた。それも所謂善人本位でなく、孰れも一方の雄でした。しかし中には迷惑をかけたもののない譯でもなかつた。

札幌出身の工學士にて長尾さんの部下として働いたものが二人ある。一人は西比利亞で働いた大村卓一氏と一人は臺灣で働いた自分であります。大村氏は現滿鐵副總裁で、工學士ではめつたに貰つた事のない旭日大綬章を親授されたナンバーワンである。而して私はゼラスト(後に説明する)で迷惑をかけた一人であつた事は、舊師に對しても相濟まなつたと思つて居ります。

それでも長尾さんをへこました人が一人あつた。それは杉山茂丸氏で、杉山氏はある時長官官邸で長尾さんに名刀を示された。刀劍について一隻眼を有する長尾さんは之を見て『よいですな何程で御求めになりました。』と尋ねられましたので、杉山氏が『何程』と返事されました。そこで長尾さんは『少々高いですな』と言はれた時、杉山氏に『良いものに比較の値段はないではありませんまいか』と言はれて一本參つたとの御話でした。

長尾さんは儒者の家に生長せられただけに漢學の造詣は頗る深く、詩文の嗜みも博ふございました。時にはあの六ヶ數陸放翁の詩集を讀んで居られましたが、あの名高い慷慨の詩「海賊寒拆月生潮、波際連檣影動搖、從

此二千三百里、北辰直下建銅標」が大祖父の長尾秋水翁の作であつたので、下手なものを書いて祖先を汚してはならないといふて決して作詩はされませんでした。文章は達意のものをかゝれ、而して又人の書いたものを注意して讀まれました。

臺灣に赴任の初、某技師の報告書の宛字假名違ひが、刻明に訂正されて文書課から廻送されたのを閲覽されて、自ら其造詣深き添削者を探索せられ、夫れが文書課に一時籍を置いた長官々邸の所謂先生なる館森袖海氏である事を知つて、非常に其篤學を喜ばれた事もあります。

私の出す粗雑な報告文は大てい其儘通して下さいましたが、時には注意を與へて貰つた事もあります。又長尾さんの名で提出しますものは中々通過させて呉れませんでした。

私が關係した最後のものは門司市に提出する門司港修築計畫であつた。自分は色々と材料を取集め、圖面に設計書を添へて差し上げました處、其設計は其儘採用されましたが文章は眞赤に訂正されて居りました、私は今尙之を保存して居ります。

長尾さんは文章許りでなく達筆でした。左手に巻紙をもち右手に毛筆を挾んで手紙を書いて居られる様は實に見事なものでした。時に横から用談を持ちかけましても少しも苦にされませんでした。近頃はかゝる場合に往々文字を間違へることがある様になつたとはつい先日の話しでしたが、いともいとも強い脳力でございました。

×

廣井先生は自分が札幌在學當時の教授であつた。長尾さんは自分の上官で且信仰の先達だつたので恩顧を受けましたが、廣井先生は始終師として欽仰し、工學については何くれとなく旨教を受けました。先生の年齢は長尾さんより四つ上で、九年前に六十七歳で逝かれたのである。

先生は南國土佐藩の名門に生まれ、曾祖父

は漢學者であり、父君は勤王家で先生が丸歳の時に没せられましたので、先生は母君の手に養育せられ、官費生として札幌農學校に入學、卒業後若干年北海道廳に奉職せられて後、ホキラー師を頼りて渡米されました。

此のホキラー師はクラーク師に繼いで札幌農學校の教頭となり、工學を教授する傍ら北海道廳の依頼にて數多の土木事業と共に奇抜な木造拱形の豊平橋を設計した先生の舊師であつて先生は創意のあつた人だと譽め居られましたが大變に親切な人であつたと見へてニトベ先生や後藤伯爵まで其ホストン府近郊コンソールドの家庭に客となつて居られるのです。

廣井先生は此師の世話にて先づミシシッピ一河筋測量に従事せられ、設計事務所、鐵道會社、橋梁製作會社と順次に轉職せられました。其橋梁製作會社でものせられた鮮やかな橋梁の計算書を拜見したこともあり、又コロンビヤ大學のパー教授から親しく『廣井君は實によく働いていた』と伺ひましたが、何分西洋人と伍して働くので歩合が悪く、三年間に四ヶ所も變つて居られます。始め一人の舊師の外に知己があつた譯ではないし、尙外國人のことゝて仕事が右から左へ續いた譯ではないらしく、當時一つの金盥が直洗ひにも足濯ぎにもなつたとの談からも、御苦心の程が察せられるゝが、之れが慥かに先生に對する貴重な試練であつて、後日先生が求職者に同情を寄せらるゝ一つの原因になつたのであらうと思つて居ります。

先生は學者肌であり、其表現が大まかな長尾さんと反對に見る所が多かつた。

廣井先生は地味な人で衣服も黒ぼけたものを好まれ、用品も素朴なもので普通の宴會には殆んど出席を拒絶され、また工學以外の事に關しては衆人に向つて意見を述べられると云ふ様な事はありませんでした。嘗て高知へ歸國なされた時、郷里では大成功者を迎へた積りで村長自ら先生の旅館を訪ひ『久振りの御歸郷で村民一同御待して居りますから若い

もの、爲に一條の御教訓を願ひます』と言はれたので先生も之れには困つたとの話がございました。

廣井先生は刻苦勉強第一主義であつた。旅行の時には何か工學の袖珍書を携帯し、發車の待ち合せの如き零細な時間にでも之を見て居られ『此位にしなれば忘れて仕様がな』と申され又私にも勧められた事もあります。

又時に『君、數多き太政大臣の内に今尙記憶さるゝ人は何人あるか？ 何んでも人は生きて居る間に心往くまでしつかり仕事を残さなければならぬ』と話されました。

明治四十二年の洋行後の話に『自分が留學時代の獨逸××大學の力學教授××氏は八十餘歳にて今猶勤続せられ、盛に理論を研究して居られるのを見て羨ましかつたが、日本人には何んとしても體が續かないのは残念だ』と話された事がありました。

又先生は模倣を賤んでオリヂナリチーを賞ばれたのである。私が札幌在學中の夏休に來札せられた松本鐵道作業所長官の歸京に際し私は先生の好意を通じて隨行を許され、當時建設中であつた青森盛岡線路を見學しました、其時陪乘の建設列車中で長官は『廣井君も鐵道へ來ればよいのに』といふ話がありましたので歸札の後先生に其話をしたところ先生は、御厚志は謝して居るが、鐵道の敷設は來誰でも出るが築港の方は未開の限界が廣い、自分は當分之を續けなければならぬ』と申されて北海道の築港に従事せられ、其オリヂナリチーを發揮して當代築港の權威となられたのであります。

築港に關聯してセメントの研究に長い時間と大なる努力を費されたのも人の知る所であるが、大學の控室に伺ふと窓先に小さなコンクリート塊が置いてあり、スポイトを以て之に海水を濯ぎそれを眺めながら談話を續けられ『近來出版した××氏の「コンクリート試験」の記載は自分の實驗とは全然違つて居ると御自分の創見を話になり、又或時は××氏

の「不定應力」には自分の著書から抜き書した處も自ら發見したかの如くに書いてある。西洋人は日本人から聞いたといふては恥辱でも思つて居る』など、話され、常に談話の大部分はこんなことでした。

かく話すと先生は工學の學究的の様ですが左様でなかつた。事業を成立せしむべき要素に注意して居られた。話の中に「スエズの運河は技術としては大したものではないが之を成立せしめたレセツプの苦心は飽までも學ばなければならぬ』との事でした。

先生が函館に往來された頃、平田文工門として起業心に富める鹽の紳商がありました。先生は此人を助けて船渠計畫をなさしめた（先生自ら木造船渠を設計され同窓遠武君が復寫した事を覺へて居る）多分それが今の函館船渠會社の前身であつたらうと思ひます。先生は工學以外にこんなにして企業にも餘力を盡されました。尙他にも二三同様のものがありと聞いて居ます。

それから先生の親切の深かりしを二三偲んで見ませう。私が北海道廳奉職中冬季函館築港の準備として港内の潮流測量に従事しましたが、冬季の事とてうねりも強く船量の爲に六分儀の使用が完全ならず、朝晝は絶食し炭火も止めて見ましたが、依然船量から脱する事が出来ないので、一ヶ月の後先生に事情を開陳しましたところ、御叱りもなく又返事も参りませんでした。其時丁度函館水道増設の儀が起りましたので私を其豫備調査に廻して下さいまして、其後私は千種水道事務所長の下に水源地の工事を預りました。工事上の事から水道事務所と區會との間に確執が起り事面倒とならんとした丁度其時來函中の廣井先生は態々私を勝田旅館の二階に呼ばれ『決して自分の地位を心配する事はない』と慰めて下さいましたが別に事なくすみしました。

其後先生が東京に轉任されて面謁した節、『此間札幌へ行つたが其折毛呂君の墳墓を修繕して置いた、墓などはどおでもよい様なも

のであるが矢張人間の儀禮である』と申され私は少なからず感激した事がありました。此毛呂氏は明治廿二年頃私の唯一の同期生で途中病没したので、私共一同協力して豊平に墓石を建てたのでした。氏が先生の教授を受けたのは一年未滿にすぎませんでした。さうして此の話は氏の没後十二三年後のことでもあります。師恩枯骨に及ぶいともゆかしき事と申さねばなりません。

又私が臺灣から歸りて後摺袂の爲大學に先生を伺候しました。夏の暑い日でワイシャツがビショビショになつたので、大學前の洋品店で新調して着換へ、古いのは新聞紙に包んで之を携へて先生の控室に参りました所が、先生は『君東京へこないか』との親情濃かき御言葉でしたが今更先生に迷惑を掛けるでないと思ひ御断りして歸り他の仕事に従事しました。其時古シャツを先生の室に忘れてきました。さうして其後七年を経た某日、某港調査の爲め私は先生に隨行する事になりました。港内では先生の御操業の御手傳などして福岡に向ひました。途中先生は私に向ひ、『君先年大學へシャツを忘れはしなかつたかね』と尋ねられましたので私は『はい忘れましたが』と答をして置いた所、其後にちやんと洗濯して小包で送附して下さいましたのには恐縮の外はありませんでした。それから先生と同宿しました。先生は食後小憩して袖珍英文聖書を取り出して黙讀され、少時黙禱して就床せられました。翌朝食事の時私は『先生は旅行中にも聖書読みをおつづけですか』と伺ひましたところ先生は『讀むが少しだよ』と御答になるのを聞いて、今更の如く先生の御信仰を感嘆しました。

先生は札幌に於てハリス監督から受洗して居られましたが、先生の信仰の表現には『人自ら信仰ありと言ひて行爲なくば何の益あらんや』といふヤコブ流の信仰が多分にあつた様に見受けられました。教會へは御出でになりませんでしたでしたが、絶へず思ひを天の一角に

引き掛けて、天地創造の神を念ひ宇宙の壯大なるを歎じ、常に『小さい自分の何等誇るべきものはないが夫れでも必死に努力する』といはれました。

私が小樽築港を見學した時 生は『人夫を日曜日に休まして見たがどうも悪い事をして仕様がなから矢張働らさせる事にした』との話でした、仕事中怪我をした職人には矢張夫れ相當の簡易な仕事を授け引續き使用して居られました。慥か片足のない者がブリキ細工をして居るのを見たことがあります、先生の労働者に對する同情は非常に強く、また如何なる場合にもボーイや給仕女にチップをやる事を忘れられませんでした。

先生は弱きを憫む心は強うございましたが人が弱音を吐く事は大嫌でした。もし左様の場合には飽くまでも激勵せられました。

乃木將軍が自決の際には世論紛々として居りましたが先生は斷然『純潔な人が己の最も尊きものを差し出して決行したる事について間違ひのあるべき筈はない、夫れを彼是論議するは失禮だ』とて大に憤慨されました。

先生は大の國家主義者で嘗て米國が日本移民の排斥を決議した時、其不義を憤り米國土木學會を退會された事があります。又『自分は出来る丈け國産品を使用するが洋服丈は仕様がなから、矢張舶來の布地を使用するの止むを得ない』と嘆じて居られました。

先生が英文に堪能なるは人の知る處であります、明治三十六年頃に私はニトベ先生に『現在日本にて充分に英語を話し、英文を讀み、且つ書き得る人が何人位ありませう』と尋ねた時、先生は首を傾けながら『まあ五十人位だらうね、而して廣井も其中の一人だらう』と返事をされました。

序でに爰で私のゼ・ラストひ話を挿話する。

明治廿三年に學生四人（平野、岡崎、小野自分）が廣井先生に引率されて修學旅行に出かけましたとき、白老驛に泊し、翌朝夫々驛馬にて歸路についたことがあります。其朝驛

馬が不足であつたので種馬までが出た。騎馬に巧みな先生は寄らば蹴らん計りに興奮した種馬に打跨り出發せられ、四人は後に續きました。所が私の乗馬は頗る惡癖があり、餘り遅足なので一鞭すると前足を折り寝姿を取つて私を振り落しました。そんな事が數回で私も止むを得ず馬頭を向け直し驛に返り他の馬に取換へて一同の後を逐つた。無論先生は一路歸札されましたが、先發の同窓等は途中島松驛に一泊しましたので、私もゼ・ラストに爰に到着しました。而して此到着順が其後の各自の運命をトした様のことになりました。長尾さんの所にゼ・ラストとかきましたのは此事です。

×

斯くの如く廣井先生と長尾さんは反對の表現多く、廣井先生は南國の産であつて秋霜の如く、反之長尾さんは北國の産で春風の如く語を代ふれば乃木將軍と兒玉將軍との如くであつた。御兩人は相互に相知り親んで居られたが其の交りは水の如くでありました。

故淺野總一郎氏を通じて兩氏の話が面白い廣井先生は常に淺野氏の屈托せざる起業心を譽めて居られました。長尾さんは道義の話は内の親父の方がよく分るが事業の問題になると淺野氏は實によく分ると言はれて居りました。淺野氏は廣井さんは純潔な學者で長尾さんは事理に長じ且敏捷な人だと評して居たと人傳に聞きました。而して私は淺野氏は兩氏の知恵を拜借して幾多の事業を興されたことを知つて居ります。

又兩氏は工學の使節として外國に使して大に名聲を博した事がある。廣井先生は上海港改良技術會議に日本代表としてであり、長尾さんはサイベリヤ鐵道管理副總裁としてである事は人の知る所である。而して兩氏に共通な點はキリスト教信者であつた事、己を持するに頗る嚴であつた事、人の困難に同情した事、己を語らざる事、天に財を積んだ事、而して最後まで努力主義であつた事で『生存中

は飽迄奮闘すべく報酬は期せずして來る可く來らざるも又意に介せん』とは廣井先生の言葉であるが長尾さんも常に同じことを語られて居りました。

廣井先生のなくなられる四年前に私は先生から次の如き端書を受取つた。

「拜復書籍早速御送與被下深謝の至りに御座候今回は實に最後の執筆にて可有之大に努力致し居り候へ共物事は忘れ易く相成困難致し居り候先是不取敢右御挨拶迄早々如此に御座候」之は最後の文通であつたが先生の最後まででの勤勉を目前に見る心地が致します。

長尾さんは本年の二月頃は御關係の會社の事業、社會事業、議員關係などで非常に御多忙でしたが、特に一夜を割いて頂きまして臺灣土木の最初の御方針を伺ひ、之を自著「願臺」に書き入れましたが、今日となりては臺灣土木の史料となり、又私に取りてよき記念になりました。廣井先生の最後日の朝は大學に赴き工學字典の編纂に従事せられ御歸家の後病んで没せられたと聞きましたが、長尾さんはある事業の計畫を終り其謝禮の爲め朝鮮總督府に參られ、農務局長室に倒れられ九日後に同所にて没せられたと聞きました。

廣井先生の告別式の日には私は玄關先の傘外套預り役を勤めました、長尾さんの告別式の日には私の近親が私に代り蔭ながら働きをしたと令夫人から御禮を申されたので満足しました。

廣井、長尾兩氏は日本土木界に取りて偉大なる存在であつたが、私に取りては又忘れ難い恩人であります。幾千年の後に、廣井先生の著者は絶版し、北海道の築港が崩壊し、長尾さんの臺灣の築港が堙滅し、禁酒會が解散し様とも、兩氏が神を通じて人生に打ち込まれた其精神は天國の記録に刻み込まれて永劫に亡びないであります。

古稀に近い自分が後輩として又弟子として感慨の餘りかくも管々しく自己の思出を記して兩先師の餘徳を偲びたいのであります。